

# カガヤキ

No.51(2020.12.7 刊行)、広報委員会編集

県立図書館発行

禁複製転載©広報委員会

## 特別企画 文化施設とボランティア

広報グループ

桜井 淳

### 1 水戸芸術館

まず、概要として、つぎの項目について調査した(調査日 2015.7、写真撮影桜井)。

#### (1)年間予算

水戸市予算 1%の約 10 億円+寄付金約 0.25 億円=約 10.3 億円。

#### (2)経費

10.3 億円(給料約 1 億円(推定 200-400 万円)、諸謝礼約 2.7 億円、印刷約 0.3 億円、光熱水道約 0.6 億円など)。

#### (3)職員数(音楽・演劇・美術部門学芸員数)

臨時職員(ATM(Art Tower Mito の略)フェイス 52 名。応募資格は短大卒・学部卒以上)含め約 100 名(臨時職員 16 名)。

#### (4)ボランティア数

37 名(展覧会の来館者といっしょに作品鑑賞。応募資格は、18 歳以上で、現代美術・美術館教育に関心があり、コミュニケーション力があり、年 4 回の研修に参加できること。主婦、企業勤労者、美術関係や

そうでない分野の教員、など)。ATM フェイスとボランティアの大部分は短大卒・学部卒以上。

#### (5)年間入館者

21.8 万名(H26)。

#### (6)経済バランス

±ゼロ。

水戸市制 100 年事業として、佐川一信氏(さがわかずのぶ、当時の市長、1940.8.1-1995.11.19、中大法卒、早大大学院法学研究科修士課程修了、水戸市長 9 年間、茨城知事選に出馬したが落選、55 歳没)により発案され、運営予算は、水戸市予算の 1% (佐川市長発案)の 9-10 億円が計上された。

初代館長の吉田秀和氏(1913-2012 年、東大仏文科卒、日本でもトップクラスの音楽・美術・文芸評論家、98 歳没)の指導理念による。二代目館長は国際的トップクラスの指揮者である小澤征爾氏(1935 年-、桐朋学園短期大学卒、79 歳、館長就任前には、水戸室内管弦楽団の顧問として、創設時から、水戸芸術館に深い理解)。

施設設計者(構造強度設計は他の事務所)は、ポストモダン建築の第一人者の磯崎新氏(いそぎきあらた、1931 年-、東大卒、東大大学院建築学博士課程修了、建築家、著書 43 冊、日本建築学会賞(1967, 1975)など各種受賞)。主要施設は 2B4F 建屋。

水戸室内管弦楽団のヴァイオリン 12 名は桐朋関係者で占められている。劇団も抱えている。定期的に「水戸市芸術祭」(水戸市民の絵画展示や琴・尺八演奏など、社会的には、趣味・特技の次元で、プロではないものの、その分野の師匠と弟子クラスが参加)を開催している。

職員の対応は、気配りが行き届いており、緊張感に満ちていた。

私の調査における評価項目は、①耐震対策、②火災対策、③非常口・非常階段、④職員能力、⑤学芸員数、⑥開催企画委員会委員名、⑦開催内容、⑧作者・演者の国際的実績、⑨社会的評判、⑩ボランティアの質。

開館四半世紀、私の総合評価としては、日本全体でも、大きく言えば、世界でも、絶対的に、高く評価されている。

シンボルタワーの設計条件と3.11後の評価について、調査した。高さ100m。直径50cm 肉厚2.1-6.0cm パイプ構造材による強度主体構造（1.5mm 外壁厚チタン板正三角形57枚）、86.6m 展望台まで内部エレベータ有り、地下6m 鉄骨鉄筋コンクリート基礎、最大震動6強シミュレーション計算実施(300-500gal.)(正常位置から水平方向へ90cm 変位)、風洞実験により地上部最大瞬間風速54m/s・頂部最大瞬間風速82m/s(正常位置から水平方向へ90cm 変位)に対して確認。私の建築に対する知識と経験に拠れば、地震と風に対する想定は、教科書どおりである。3.11後、構造強度設計者による現場点検が実施されたが、計算による水戸市役所庁舎並みの「耐震診断報告書」の存在は、確認できなかった。

これまでの質問に対して、広報担当者の対応は、パーフェクトであった。シンボルタワーのエレベータの昇り降りの担当者の対応も申し分なかった。関係者すべての対応はパーフェクトだった。



水戸芸術館の高さ100mのシンボルタワー(82mに展望台あり、エレベータと非常階段あり)



シンボルタワーへの階段(シンボルタワー全体の構造設計を調査中、特に、基礎工事方式)



水戸芸術館南側道路と施設敷地境界(街の一区画全体を利用、元五軒小学校敷地)



シンボルタワーへの階段拡大



北側施設 2 階から南側を望む



施設東側から西側施設を望む(最左端の円形施設は会議室、中央の円形施設は演劇・催物会場(3階まで吹き抜け構造)、右端施設はコンサート会場)(施設配置は、南向きのコの字型で、敷地中央部は、芝生で、さまざまな野外催物開催が可)



水戸芸術館東側入口



東側入口から入って振り向いた時の光景(2階部分に見えるのはパイプオルガン、普段は通路部分がコンサート会場となる)



シンボルタワー東側から北西方向施設を望む(水戸芸術館施設のデザイン設計(構造強度設計は別事務所)はポストモダン建築の第一人者の磯崎新(いそざきあらた)事務所、中を見ると特徴のある良い設計であることを痛感する)



東側入口から入って見える光景



東側入口を入ってすぐ左側にあるおみやげコーナー



東側入口から入って右手側に受付



2階の絵画展示コーナー



受付の隣におみやげ屋



西側入口



西側施設を北側へ方向に見る



シンボルタワー展望台 1



天気の良い日のシンボルタワー頂部



シンボルタワー展望台 2



天気の良い日のシンボルタワー2F



シンボルタワー展望台 3



シンボルタワーエレベータ



シンボルタワー展望台 4(南側の千波湖とその先の茨城県庁ビル)



シンボルタワー展望台 5(点検のための階段)



シンボルタワー展望台 6(非常階段。ドアは、通常時には、ロックされているものの、青いプラスチック部を破ると、ロックが外れ、ドアが開く)

## 2 茨城県近代美術館

まず、概要として、つぎの項目について調査した(調査日 2015.7、写真撮影桜井)。

### (1)年間予算

約 2.1 億円。

### (2)経費

管理運営費約 1.5 億円。

### (3)職員数(そのうち学芸員数)

41 名(7 名、17%)。

### (4)ボランティア数

172 名(申込書提出のみ、一定数維持、作業内容は、来館者案内、資料切り抜き、資料整理、中村彝アトリエ案内などであり、茨城県立図書館ボランティアに共通する作業内容があるため、両者のボランティアを掛け持ちしている人もいる)。

### (5)年間入館者

約 7 万名。

### (6)経済バランス

±ゼロ。

館長(調査当時)は市川政憲氏(1946ー、東大文学部美術史学科卒、東京国立美術館勤務、後、副館長、愛知県立美術館館長、2007 年より、茨城県近代美術館館長、美術評論家)。

施設設計者は吉村順三氏(1908.9.7ー1997.4.11、東京芸大建築卒、東京芸大教授、日本建築学会賞(1956)など)。

維持運営には、電源立地地域対策支援金(原子力施設周辺市町村であるため)、広報費用は、宝くじ収益金で賄われている。

収蔵作品数は、2014 年 6 月公表資料に拠れば、3700 点。毎年単純平均で 150 点購入。

外部専門家による作品展開催のための特別な企画検討評価委員会は設けていない。館長と学芸員からなる委員会で決めている。

3.11時、エントランスホールの銅像転倒などがあつたものの、特に、耐震評価計算は、実施していない。私は、建設時から現場調査をしてきたが、建屋骨格は、驚くほど強靱な構造になっており、耐震性に懸念すべき問題は、ないと考えられる。

1Bの美術品の収納庫の見学を申し出たものの、必要条件維持(常時、温度・湿度管理、害虫侵入防止、盗難防止)のため、許可されなかった。

私の調査における評価項目は、①耐震対策、②火災対策、③非常口・非常階段、④職員能力、⑤学芸員数、⑥開催企画委員会委員名、⑦開催内容、⑧作者の国際的実績、⑨社会的評判、⑩ボランティアの質。

私の総合評価としては、日本でも、中クラスの美術館で、特に、際立った特徴が、見られない。すべてにわたって平均的。



展示案内



入口の2階への階段(北側)



入口



エントランスホール1(入口から南を見る)



エントランスホール2(受付から西を見る)



エントランスホール 3(南側の展示物)



エントランスホール 6(東側の展示物)(2F 南側の  
大きないくつかの部屋が常設コーナーで、3F 全  
体が 2 週間ごとに替わる絵画や美術品などの展  
示コーナー)



エントランスホール 4(南側の展示物)



2F ロッカー(展示コーナーでは、私物持ち込み  
禁止のため、ここに預ける)



エントランスホール 5(東側の展示物)



2F 売店(美術関係みやげ品)





2F 展示コーナー



1F 大ホール入口近くの控え



2F 映像コーナー(展示物や画家などの解説映像、定員 30-50 名)



1F 会議室・受講室への通路



2F 図書コーナー(閲覧のみで貸出不可、美術関係書籍豊富)



北側石庭 1



北側石庭 2(東側の高台から望む)



3F 北側テラス



南側物品搬入口



東側職員専用入口



南側光景



職員専用入口から北東方向を見る(建物は  
県民文化センター)



西側 1(林)



西側 2(千波湖)



西側 3



中村彝アトリエへの道(建屋の少し離れた東側)



西側 4



中村彝アトリエ建屋(内部案内はボランティアが担当)(常にきれいに管理されている)(建屋は東京から移設)



2F 北側通路



アトリエ建屋南側(静かで落ち着いた良い雰囲気)



アトリエ建屋西側入口(当時のアトリエ建屋としては、りっぱですが、住居兼アトリエとしたら、狭い)



アトリエ建屋西側光景



アトリエ建屋の西側境界に季節のアジサイ

### 編集後記

茨城県立図書館ボランティアは、世界的コロナ禍のため、活動休止状態にあるものの、広報グループは、Wi-FiとPCがあれば、自宅での作業が可能のため、活動を継続中です。

今回の「特別企画」においては、コロナ禍の影響を受けないように、新たな現場調査はせず、2015.7に調査した事実関係と写真のみで体系化しました。

過去6年間、ボランティア活動の実態と特徴を把握するため、水戸キリストの教会、水戸芸術館、茨城県近代美術館の運営内容とボランティアの実態について、調査してきました。

水戸キリストの教会のボランティアは、究極の奉仕活動であり、他の組織の活動レベルと同程度ではなく、桁はずれに高いレベルにあります(「かがやき」No.34, 36参照)。水戸芸術館のボランティアも、専門知識を重視した募集の仕方をしており、他の組織と、やや異なる特徴を有していません。茨城県近代美術館のボランティアは、茨城県立図書館のボランティアの特性に近いので、両者を兼ねている例が少なくありません。

ボランティアは、誰に知られることもなく、ただ、黙々と、自身の心を磨く修行のための行為であり、修行僧(雲水)と共通するものがあります(私は、63歳の時、曹洞宗に出家し、現在、雲水として修業中)。

各組織のボランティアの継続期間を調査したところ、数年から10年です。茨城県立図書館ボランティアもそのくらいです。

広報グループは、独自の分析データと茨城県立図書館ボランティア担当事務局の協力による分析データを検討し、茨城県立図書館ボランティアの総合的特性をまとめることができました(「かがやき」No.48参照)。

桜井 淳